



5月初旬に薄紫色の花を咲かせます。

地域の人々に愛される「おじいさんの木」 天竺川児童遊園

庄内東町の天竺川児童遊園内にある大きな桐の木。NPO法人おおさか緑と樹木の診断協会が「天然記念物や保護樹木ではないが、地域の人々に愛され、まちの歴史を見守ってきた老木や巨木、名木」を登録する「おじいさんの木」に選ばれた木です。

平成22年(2010年)の登録以来、この桐の木を見守り続ける同協会の樹木医は「もとは2本あり、1本に病気が見つかりました。公園利用者や通行車両などの安全確保のために伐採することになりましたが、地域の人々の『残したい』という思いにより、切り株から出た芽を後継木として育てることになりました」と振り返ります。

まちなかにある樹木は成長すると、電線に当たったり、風で枝が折れたりする可能性があるため、安全性の観点から伐採されることが多く、一般的には100年以上も生きるのには難しいと言われてます。そんな中、後継木を育てたり、木の根を守るためにフェンスで囲ったりなど、人と樹木がまちなかで共生するための模索が続いています。



伐採した木の切り株から萌芽(平成23年9月)

2本あった桐の木(平成23年2月)

現在、後継木は順調に育っています。



池を活かした自然環境保全型の都市公園 羽鷹池公園

少路一丁目にある羽鷹池公園。その名前のとおり羽鷹池周辺を整備してつくられた公園です。もともと緑豊かな丘陵地であった、多くの野鳥が飛来する自然に恵まれた環境でした。昭和初期からの都市化に伴い、多くの池が埋め立てられて学校や公園などの公共用地となる中、羽鷹池の上池と下池もその候補地の一つに挙がりましたが、「この池を守りたい」と願う市民と市の話し合いによって、面積は縮小されたものの、両池とも残されたのです。

自生していた樹木を多く残すほか、野鳥のエサとなる実をつけるアオキのような木を植えたり、噴水や水中ミキサーといった水質を保全する対流装置を導入したり、日本在来種のチガヤによる草原の形成を図るなど、自然環境を守る工夫がこらされました。その努力の甲斐あって、今でも野鳥が飛来し、池で泳ぐ姿を観察できます。

この自然豊かな風景を、これからも守っていききたいと思えます。



上池



下池



まちなかで四季折々の自然と出会う 服部緑地

総面積約126ヘクタール、甲子園球場の約33倍という広大な敷地に都市緑化植物園を擁し、「とよなか百景」にも選ばれている服部緑地。園内には「21世紀に残したい日本の自然100選」に選ばれた「千里丘陵の竹林」の一部であるいなり山があるほか、夏にはカブトムシやクワガタムシ、シオカラトンボなどの昆虫、冬にはカワセミやメジロ、ヨシガモといった野鳥を見ることができ、まちなかの公園でありながら豊かな自然を満喫できます。

春

散策しながらお花見

桜は各所にあるので、散策しながら観賞。円形花壇ではチューリップが咲くなど、園内全体が華やかな雰囲気になります。日本民家集落博物館北側の外周では、民家を背景に咲く桜の風情を楽しめます。



水辺で涼む

園内には、山ヶ池、若竹池、中池、新宮池、うづわ池のほか、噴水や小川などの水辺があります。中でも、山ヶ池には桃色のハスが、日本庭園の池には真っ白なスイレンが、咲きほころぶさまが美しく、涼やかです。



夏

青空が映える夏の山ヶ池。



夕焼けに染まる秋の山ヶ池。

秋

絵になる紅葉

ドングリやマツボックリなどの木の実や、カラフルに色づいた木の葉がたくさん。西中央広場にある円錐形の樹木・タイワンフウは秋のシンボルです。緑から真っ赤に紅葉していく過程も見どころ。



冬

足もとに広がる冬景色

早朝には、円形花壇などに霜が降りて、まるで雪が降った後のように見えることもあります。池にも薄く氷が張る日もあります。花といえば、梅林。200本もの紅白の梅が、2月下旬から3月上旬あたりに見ごろを迎えます。



「空を望めるのも服部緑地の魅力の一つです。建物や電柱等に遮られることなく空が見わたせるので、周りの樹木の緑が際立ちます。また、季節によることはもちろん、時間帯によっても、景色の見え方が異なるんです。おすすめは園内西側にある山ヶ池。夏なら空の青い色にひとときわ池が映え、秋なら夕焼け空に染まる水面が印象的です」と服部緑地管理事務所 保坂啓明さんは話します。

園内で空や自然を眺めていると、この公園が市街地に囲まれていることも忘れてしまいそうです。